大岡昇平論

鈴木 斌 著

以文選書
32

教育出版センター

大岡昇平論——柔軟にそして根源的に

鈴木　斌著

NDC 914
鈴木　斌（あきら）　評論
東京　教育出版センター　1990
216P　18.2cm　（大岡昇平論）

大岡昇平論—柔軟に，そして根源的に—以文選書32

1990年７月27日　初版発行　　　定価2400円（本体2330円）

著　者——鈴木　斌©
発行者——柴崎　聰
発行所——㈱教育出版センター
〒101　東京都千代田区神田神保町2—46
電話03(239)5438　振替口座東京0—14612
編集・製作　銀の鈴社
印刷・電算印刷
製本・協栄製本

© Akira Suzuki 1990 ISBN4—7632—1520—5　C3095　P2400E
Printed in Japan
★乱丁落丁はお取替えいたします

序

このたび気鋭の研究者である鈴木斌の労作『大岡昇平論』が上梓される運びとなったことは、友人として大きな喜びである。

戦争を知らない世代の鈴木が、もっとも苛酷な戦争の実態を体験し、その中で生の凝視を貫き通した大岡昇平の文学の魅力に魅かれたのである。私のように戦地へは行かなかったけれど、一年十か月の軍隊経験をし、侵略戦争中の日本人の一人として生きた者よりも、ずっと生々しい実感をこめて大岡昇平論を書いている。これは鈴木斌が文学を通して純粋体験を行った成果だと私は考える。ある意味では、なまじっかな経験を通過した者は、自己の目盛りでしかものが見えて来ないのである。文学など芸術の世界は、すぐれた芸術家ほど、対象を純化して描くものだから、享受者を豊かにし美しくする働きがある。

本書の総論に当る第一章の「大岡昇平——その文学の軌跡」は、そのような大岡文学の真実に迫る緻密な論考を展開している。

また第三章の「大岡昇平における方法上の「試み」Ⅰ——『俘虜記』から『花影』まで」も、鈴木の文学論として特色のある総括を行っている。大岡は〈社会の構造、歴

史のプロセスをよく感得した上で〉〈虚無〉を〈表象〉したのだと、大岡の戦争体験の傷跡の深さを見定めた上で、規定している。この総括で鈴木の述べた内容はたしかに評価出来る。しかし、社会や歴史の把握のたしかさと、精神的虚無の世界とを、大岡昇平の内部における分裂と見、そのはざまを苦闘しつづけた作家とする視点もあろうか。これは大岡昇平の作家像は、多くの批評家や研究者によっても形作られていることと、そしてその対比の上での、措定というより厚みのある論を、鈴木斌の今後に期待したいための発言である。この先行する大岡文学の作品論を、作品個々の分析論の中でも対比させ、鈴木の論評の独自性としてきわ立たせることへの今後の期待でもある。

また、「大岡昇平における方法上の「試み」II」の〈1『愛について』の愛〉などに見られる、結婚の評価や男女の愛についての大岡文学の分析は、少しく作られた観念の暗さという印象がある。ここでは鈴木が自身の世界から離れて、他者の意見に耳を傾けているのではないかと、私には思われる。しかし、これは私の一種の恣意に基づく意見であり、鈴木斌の眼は冷静に人生を凝視し、社会の矛盾に対しては、熱情に燃えて批判する姿勢としてこそ認めるべきかもしれない。

思うに、鈴木が小田切秀雄・荒正人そして西田勝という優れた師たちの薫陶に導かれて、その研究を充実させて来た道筋については、まことに恵まれていたという外はない。私などは、鈴木の師たちは自身の道を、自身の力で切り拓いて、文学者として、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さらに文学者としての筋を通した社会運動家として、傑出した仕事をしつづけて来たと考えている。鈴木斌もまた、今後その師たちにつづいて、柔軟に、しかも主体性を持した姿勢をもって前進することを、私は期待したい。そして、鈴木斌がさらに輝かしい業績を挙げて、広く文学研究者として雄飛することを祈ってやまない。

一九九〇年陽春の日に

布野　栄一

大岡昇平論

目次

序……布野栄一

第一章
大岡昇平─その文学の軌跡……11
1 現代にとっての大岡昇平　2 戦争体験からの自己探究　3『レイテ戦記』に描かれた特攻隊　4 大岡にとってのフィリピン　5『堺港攘夷始末』の意味するもの　6『昭和末』が投げかけるもの　7 大岡文学を生かすもの

第二章
『俘虜記』『野火』の世界における想像力……45
1『俘虜記』の緊迫感　2『俘虜記』の文明論的側面　3『野火』の実験
『レイテ戦記』論……65
1 鎮魂の文学として　2〈特攻〉評価をどうみるか　3 マクロ的な視点

『事件』―真実と裁判的真実……83
1 裁判と偶然性　2 裁判的真実とは何か　3 あるべき裁判とは
『酸素』の構造……97
1 構成の複雑性について　2 人間関係の描写の複雑性　3 井上良吉の人物像
4 『酸素』の意図　5 中絶に至った理由
『雲の肖像』論……121
1 人間の不条理をどう描いているか　2 新太郎の計画　3 思考と感情の背理
4 現代日本の問題を狭小化した小説

第三章

大岡昇平における方法上の「試み」I―『俘虜記』から『花影』まで……137
1 現代小説に至る道　2 現代小説が提起している問題
大岡昇平における方法上の「試み」II―『愛について』・『野火』・『天誅組』を中心に……161
1 『愛について』の愛　2 自己の再建　3 大岡の歴史小説観

第四章

柔軟に、そして根源的に――大岡昇平の方法 …… 185
大岡昇平と一五年戦争 …… 187
1 大岡の複眼　2 天皇制批判の根拠　3 自己の再検証　4 死者の証言　5『ながい旅』をどう評価するか
初出一覧 …… 209
あとがき …… 211

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

大岡昇平 ── その文学の軌跡

1　現代にとっての大岡昇平

大岡昇平が亡くなって一年余になろうとしている。時は流れ、今一人の戦後文学者として大岡昇平は文学史の中に組み入れられようとしている。

その死後、岩波書店から『大岡昇平の世界』『昭和末』が刊行され、また沖積舎から中井正義『大岡昇平ノート』が刊行されたが、共に過去の文学者としての扱いの上にたっての論述である。

太平洋戦争の敗戦後、日本はすさまじく変化し、今日、一応の物資生活の向上を実現した。しかし、文学や思想の分野では、明治以来そうであったが、ことに戦後は、ひとときある傾向につき進んだかと思うと、短い場合は一年も経ずに次の潮流に衣がえするという現象がくりかえされてきた。文学者のみならず日本人一般の無定見とも思えるまでの、時代の流行に流されやすい文化的貧困がある。

このような状況の中にあって、大岡昇平は時代の動向に敏感に反応しつつ、一貫してその文学精神

と思想を貫いてきた文学者の一人であると思う。

もちろん細部にわたって検討していけば、彼の文学の中にも多少の振幅があり、その文学の表象の面では首尾一貫性を欠く部分がある。しかし、その根底においては、変化することなく、一筋の道を貫いてきたと言ってよいだろう。その一貫性を生み出したものとは何か。それは一言で言えば、皮肉なことであるが、作家としての大岡昇平は、あの太平洋戦争が無かったら誕生していなかったと言えるであろうということに起因する。だが、彼は戦争体験を生かすことによって、時にニヒリスティックになりながらもその長寿の生を終えるに至るまで十全に文学活動を展開した。これは大岡自身も予期しなかった道程であるとも言えるだろう。

三五歳という中年に至って日本軍隊に召集され、わずか一年余の軍隊生活の体験をもって俘虜という、当時としては最も不名誉な姿で帰国した。しかし、大岡はそのような言わば宿命とも呼ぶべき状態をその後の文学活動から考えるに、荒正人ふうに表現すると、「宿命を特権化」した文学者であったと言えるであろう。

つまり、今日の社会は経済の高度成長下にあり、物資的には一見豊かである。しかし、実は非人間的な弱肉強食の論理が優先する社会状況である。この中で、何人の作家が、大岡のように自己の立場を客観的に凝視し、人間のあるべき姿に向かって、その文学を展開してきたか、と言えるであろうか。このような言い方自体、ナンセンスという声が聞こえてくる現代社会、また、現代の文学状況である。

時代の流れの中に身を任せ、その日ぐらしを立てていれば、文学者のみならず、大多数の日本人が

肉体的には生きていける時代である。だが、ひとたび社会の実相の根本を見つめれば、現代日本社会は明日をも予測できない不安に満ちた世界ではないか。そのことに、多くの人々は、ことさらに目を閉じて真の姿を見ようとしないのではないか。経済一つとって考えても、この繁栄がいつまで続くか、誰が予測できようか。さらに核の恐怖、国民の所得格差の拡大等々の中で、人々はひとときの娯楽等に身を任せ不安感をまぎらわしている。

大岡昇平は、このような現代的状況に対して厳しい眼をもってみつめ、明日をどのように生きていくかを、その死に至るまで追究し続けた作家であった。

大岡のこのような文学活動を、今、初期作品から順次見ていくことを通して、我々が大岡昇平という一人の作家から何を学び、また何をしていかなければならないかを考えていきたい。また、現代の文学状況は、戦後文学はすでに終焉したとの論調が言われて久しい。しかし、果してそのように結論づけるだけでいいのだろうか。そもそも基本的に大岡は自身が戦後文学者の一人としてくくられることを拒否したが、実質は最も戦後文学の特質を持ち続けた文学者であった。

大岡昇平は正に、戦後において、自己の精神の最も深い部分から、自己を語ることによって文学的出発をした。作家としての出発を告げることになった『俘虜記』一編は、いわゆる小説としては、従来の文学理論や概念から考えれば、著しくその体裁を異にしている。

周知のように、『俘虜記』一編は、ミンドロ島において、一人の若い米兵を射てば殺すことができる状態にあったにもかかわらず、主人公である「私」は射たなかった。それは何故か。反戦の強い意志

からか。あるいはコスモポリタンとしての意志か。しかし、事実はいずれでもない。様々に自己凝視を重ね、その意味づけ理論づけを行うとしても「私」自身にとって納得することができなかった。それは決して大岡が優柔不断でもなく、当時、また高い理念に立っていたからでもない。ただ一つ、敵を「射つまい」と心に誓ったことが、そうさせているのである。つまり人を殺さないという信念である。

それは次のような「私」の観念から出ているのである。すなわち、三五歳で、召集された「私」である大岡にとって、自己の死が目前にある以上、敵を殺すこと、あるいは殺そうと思うこと自体、ナンセンスであると思ったことに他ならない。それは『俘虜記』はもとより、『レイテ戦記』や、後年の『ミンドロ島にふたたび』にかなり鮮明に表現されている。

そもそも大岡にとって若き日から人生をニヒリスティックに見る姿勢は濃厚であり、終生ぬきがたいものとしてあったと思う。青年期に小林秀雄、中原中也等に囲まれての文学的影響の中にあったことも、彼の文学的傾向を、一層そうさせたのではないかと思う。それは次のように言い得ることもできるのではないか。彼等から大岡は、人生はそれほどむきになって生きるに値しないという観念を養うに至ったことも大いに影響していると考える。

『俘虜記』一編は、大岡にとってそのような自己を打ち砕き、新しい自己を作り出していく作業でもあったと言い得ることができるであろう。このような意味あいにおいて、従前の小説のスタイルでは十分に自己の心性や思想を表現するのに足らないと思ったのではないか。大岡にとって、予想を超

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com